

85 誌上発表

曲直瀬流の口訣・医案に注目した
『和漢纂言要方』『本邦名医類案』の解析

星野 卓之, 小曾戸 洋, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】江戸時代に入り曲直瀬玄朔・岡本玄治の残した曲直瀬流口訣・医案が出版されるようになって以来、秘伝とされていた医療知識の公開が一段と進んだ。下津春抱は江戸初期までに活躍した有名医家が残した口訣・医案につき、引用元を明らかにしつつ『和漢纂言要方』『本邦名医類案』を出版した。今回、この2書にみられる医家の出現頻度から、江戸中期に曲直瀬流が斯界に及ぼした影響を探る。

【方法】病門別頻用処方口訣ごとに引用元を記す『和漢纂言要方』（正徳五年（1715）刊）からは各日本医家の口訣数を、また『本邦名医類案』（宝永六年（1709）刊）からは医家ごとの症例数を集計した。

【結果】『和漢纂言要方』では中国医書における引用が少ない龔廷賢方（『万病回春』方など）を中心に日本医家の口訣（総数356）が載せられていた。口訣の内容は構成生薬の効能解説や症例を含んでいた。引用の多い順に曲直瀬玄朔（82）、中山三柳（45）、岡本玄治（37）、半井瑞策（33）、曲直瀬親純（29）、吉田宗恂（29）、森艸全（18）、長沢道寿（17）、曲直瀬道三（14）、名古屋玄医（11）、野村謙亨（11）、古林見宜（10）、竹田定加（6）、吉田宗桂（3）、野間玄琢（2）、半井明親（1）、寿徳庵（曲直瀬）玄由（1）、林市之助（1）であった。医家名が不明な引用である「先輩」（6）と「家蔵」（1）を除いたうち、78%が曲直瀬道三門下であった。『本邦名医類案』の医案数（総数252）は多い順に曲直瀬玄朔（38）、岡本玄治（33）、半井瑞策（31）、竹田定加（22）、吉田宗恂（22）、古林見宜（20）、曲直瀬親純（19）、中山三柳（12）、曲直瀬道三（11）、吉田宗桂（8）、坂浄快（7）、曲直瀬正琳（7）、野間玄琢（7）、林市之助（3）、施薬院全宗（2）、森艸全（2）、長沢道寿（2）、井上玄徹（2）、名古屋玄医（2）、施薬院宗伯（1）、小川（朔庵か）（1）であり、曲直瀬流が64%を占めた。

【考察】『和漢纂言要方』『本邦名医類案』は江戸時代に入って百年という時点で収集し得た口訣・医案の総覧といえる。室町以後の有名医家を多数取り上げており、うち一部は今となっては出典不明の貴重な内容である点が注目される。これらのうち道三門下からの引用が6-7割を占め、江戸時代に限ればほぼ曲直瀬流となっていることから、その盛行ぶりがうかがえる。下津春抱がどの門下にあったかは明らかでないが、様々に分派していた道三流のうち寿徳院を除いて幅広く学ぶ環境にあったと考えられた。下津春抱には『錦囊医方詳解』という労作もあり、ここでは清代の汪昂『医方集解』を取り上げ、構成生薬の説明と加減をまとめることで今回取り上げた2書の不足を補っている。これらの医籍では明清医書が蓄積してきた処方解説や医案を引き継ぎつつ、我が国固有の知見を追加して拡充する編集方針がとられた。このような医書の出版は口訣・医案を整理した形で大衆に広め、日本漢方の独自化にも大いに寄与するところがあったであろう。

【結論】『和漢纂言要方』『本邦名医類案』における口訣・医案の引用頻度からは、曲直瀬流が江戸中期の漢方医に多大な影響を及ぼしていたことが推察された。